

〔續世繼宇治川瀬〕爲忠は、略○中あまりふとれりしかばにや、口かわくやまひして、十年ばかりこも

りゐながら、四位の正下までのほりしも、三條鳥丸殿つくりたりしたびは、おとこそこもりたれども、をんな○爲忠妻待賢のみやつかへをすれば、加階はゆるしたぶとおほせらるとて、顯頼の中納言は、大原うとくおぼゆとぞ、よろこびいふとて、たはぶれられけり、

〔宇治拾遺物語三〕これも今はむかし、法輪院大僧正覺猷といふ人おはしけり、その甥に陸奥前司國俊僧正のもとへ行て、まいりてこそ候へといはせければ、たゞいま見參すべし、そなたにまばしおはせとありければ、まちゐたるに、二ときばかりまで、出あはねば、なまはらだ、しうおぼえて、出なんと思て、ともにぐしたるさうまきをよびければ、出きたるにくつもてこといひければ、もてきたるをはきて、出なんといふに、このさうしきがいふやう、僧正の御房の陸奥殿に申たれば、どうのれとあるぞ、其くるまいてこととて、小御門よりいでんとおほせ候つればやうぞ候らんとて、うしかひのせたてまつりて候へば、またせ給へと申せ、ときのほどぞあらんずる、やがてかへりこんすとぞとて、はやうたてまつりて出させ給候つるにては、かうてひと時には、すぎ候ぬらんといへば、わ雑色はふがくのやつかな、御くるまをかくめしのさぶらふはと、我にいひてこそかし申さめ、ふかくなりといへば、うちさしのきたる人にもおはしまさず、やがて御尻切たてまつりて、きとくよく申たるぞとおほせごと候へば、ちからおよばず候はざりつるといひければ、陸奥のせんじ歸のほりて、いかにせんと思まはすに、僧正はさだまりたることにて、湯ぶねに藁をこまぐとさきりて一はた入て、それがうへに筵をまきて、ありきまはりては、さうなくゆどのへ行て、はだかになりて、えさいかさいとりふすまといひて、ゆぶねにさくとのけざまにふすことをぞま給ける、陸奥前司よりてむしろをひきあげて見れば、まことにわらをこまぐとさきり入たり、それをゆどの、たれぬのをときおろして、このわらを見なとり入て、よくつゝみて、